

根津嘉一郎と古美術品・茶道具

齋藤 康彦

はじめに

茶事評論家の佐々木敬一（三昧）は『茶の道五十年』（淡交社、一九七〇年）の中で、茶の湯に入る動機を、（イ）お点前から、（ロ）懐石から、（ハ）道具から、（ニ）社交上からの四つに分類している（1）。次稿『『青山荘清賞』の世界』でみるように、根津嘉一郎は若い頃からの道具好きで、明治三九年（一九〇六）十一月に大阪の平瀬亀之助（露香）家人札会で八幡名物「花白河蒔絵硯箱」を落札して書画骨董の世界に彗星のように登場している。その後、益田孝（鈍翁）、高橋義雄（箒庵）、岩原謙三（謙庵）ら東都の近代数寄者たちの茶会にたびたび招かれ、「茶債」が貯まりに貯まって自会を開かざるをえなくなった根津嘉一郎（青山）は、当然、道具から茶の湯の世界に入ったといえる。「道具数寄」の典型といってもよいだろう。根津嘉一郎も「若い頃から道具好きだった私は、道具と付きものの茶の湯には中年から力を注ぐやうになり、青山の自宅は云ふまでもなく、軽井沢や熱海や大磯の別荘にも茶室を建てた」と述べている（2）。この対極にいるのが、茶をやるという理由を次のように語っている郷誠之助である。

やらうと思つてははじめ計画を立てて見たことがあるが、百万円な

ければ一と通りのことは出来ないといふことがわかつてやらないことに決めたのだ。茶は道楽にしては金のかかるもので、他人が良い茶器でやつてゐるのに、自分だけ見すばらし器でやるといふのも気が利かない。それにあればつきあひがあるから、招待されたなら自分も招び返さなければならぬ。その時、先方は十萬円の茶碗でやつてゐたのに、自分だけ百圓の茶碗では困る。一体お茶といふものは、そんな物を見せびらかしごっこする所に味があるのかも知れない（3）

事実、郷誠之助は筆者が構築した茶会のデータベースには登場していない。根津嘉一郎の膨大な古美術品や茶道具類の蒐集の水準の高さは、自らが企画した『青山荘清賞』に収録された美術品や根津美術館の豊かな収蔵品からみても明かである。このため、根津嘉一郎の開く茶会は参会者の目を見張らせ、感服させずにはおかない自慢の名品がずらりと並んだ。郷誠之助の茶の湯に対する「茶は道楽にしては金のかかるもので、見せびらかしごっこする所に味がある」という見方もこの辺の事情を指しているのかもしれない。この点については後にみるように批判もあったが、それが根津嘉一郎の茶風ともなっている。高橋義雄の「茶会記」から、昭和六年（一九三一）四月に東京品川の

御殿山にあった碧雲台で開かれた「第三回遠州会」において太郎庵を受け持った際の根津嘉一郎の品揃えの一端を示そう。

会記面を一見すれば、青山翁は遠州蔵帳品秘藏家として当代第一の称ある会主鈍翁に対して、正々堂々御殿山碧雲台に出陣したる其意気の壮なるを会得するに難からず。茶入の遠州箱書付中興名物敷島大海、茶碗の同箱書古井戸忘水、茶杓の遠州より大聖寺前田侯松飛驒守に贈られたる共筒の如き、何れも遠州縁故品中の逸物で、斯くてこそ太郎庵の受持甲斐もありけれど、参会の人々異口同音に讃歎を禁じ得なかつたのは、誠に当然の事だらうと思ふ(4)

小堀遠州ゆかりの中興名物「敷島大海」茶入、「古井戸 忘水」茶碗、「遠州共筒 飛驒様」茶杓などが並んでいる。高橋義雄や野崎広太(幻庵)の「茶会記」を読むと、寄付の飾付にはじまり、本席での掛物、炉辺、炭手前の器物、懷石の献立や使用した食器、濃茶席や薄茶席で使用された茶道具の名称を列記した道具組の紹介に次いで、茶道具の見所や、その来歴などが実に詳しく記されている。改めていうまでもないが、茶席における茶道具類の取り合わせは、当該の茶会におけるテーマや亭主の趣向を表現しており、亭主の個性を示す茶会における重要な構成要素である。当然、評者の目もそこに注がれ、茶会の成功、あるいは失敗を大きく左右する。

ここに「茶会記」によって近代数寄者の茶風を語らせようとする高原富保『近世名茶会物語』(毎日新聞社、一九八五年)、鈴木皓詞『近代茶人たちの茶会』(淡交社、二〇〇〇年)、熊倉功夫『近代数寄者の名茶会三十選』(淡交社、二〇〇四年)といった一連の仕事がうまれる根拠がある。なお、『近世名茶会物語』は「近世」と題されているが、高橋義雄『東都茶会記』を使用して明治以降の近代数寄者二四人の茶会が対象となっている。

近代数寄者の茶界の総体像のなかに個別の近代数寄者を位置付けようとする試みには筆者としても賛成できる。前掲した三冊の文献においては、根津嘉一郎の茶会として大正七年(一九一八)十一月の「初陣の茶会」(5)、同一一年十二月の「壺割り茶会」(6)、同一三年二月の「歳暮の茶会」(7)が取り上げられている。お茶人のその後の茶風を暗示するといわれる「初陣の茶会」と、完全であった花入の耳を打ち欠いた千利休の故事に倣った「壺割り茶会」の選択には異論はないが、大正一三年の「歳暮の茶会」を根津嘉一郎の代表的な茶会とした鈴木皓詞の意図は今ひとつ理解できない。それはともかく、かかる方法は、主に「茶会記」の記述を史料源として紹介したものであり、オリジナリティーという点での不満が残る。

しかし、五三回を数える根津嘉一郎の自会に閑説した「茶会記」を取り纏めただけでも優に一冊のボリュームを持った史料集となるだろうし、それは筆者の目指す方向から大きく外れる。本稿では次稿「青山莊清賞」の世界」における検討結果を承けて、「モノ」に即して根津嘉一郎の茶会を検討したいと考えている。

方法は、これまでもたびたび利用してきた各種の「茶会記」を情報源とする根津嘉一郎の茶会ごとの道具組みのデータベースを構築して、筆者が得意とするデータの大量処理手法を駆使した検討を進める。データベースの作成にあたっては道具組みの記載のない「茶会記」は外し、複数の「茶会記」が残されている茶会では内容の充実している「茶会記」を使用した。対象となった茶会は全部で五一会である。ちなみに、内訳は歳暮茶会が一七会、大寄せ茶会が一四会、薪庵茶会が六会、初風炉茶会が三会、以上に区分できない茶会が一一会である。構築されたデータベースは膨大なものであり、一挙に掲載することは不可能である。また、五一会を数える茶会に悉皆的に言及しようとすれば極

めて煩雑となる。

そこで第一段階として、飾付・掛物、花入、釜、茶器、茶碗、茶杓といった茶道具類の使用状況の総体的な把握にウエイトを置き、使用頻度をメルクマールに茶道具類の使用にあたっての特徴や、根津嘉一郎の好み、さらには、時代的な変化などを明らかにする。

次いで、茶会の道具組みを具体的に検討する。これまでの茶道史研究においてもデータベースの利用がなかったわけではない。例えば、谷晃『茶会記の風景（河原書店、一九九五年）』は、コンピュータを駆使してデータベースを構築している。しかし、茶会ごとの道具組みが分からないなど十分に活かされていない。また、熊倉功夫『近代茶道史の研究』では、安田善次郎（松翁）の『松翁茶会記』を使用して三六五回もの茶会の道具組みのデータベースを構築しているが、掛物の時代的な変化と江戸時代趣味の残存の確認にとどまっている（8）。とはいえ、道具組みの検討は茶道具類についての知識に乏しい筆者にすれば簡単な作業ではない。

そこで筆者の知識不足を補うために以下の方法を採用した。まず、『茶会記』から「道具評」、「道具組評」、「茶略評」、「人物評」などの部分を抽出したデータベースを構築する。その上で、茶評者の「目」と「言葉」を用いて、当該茶会のテーマや亭主の趣向、さらには、道具組みに対する評価などを組み立て、それらを材料にして、本稿の主題である「モノ」に即して根津嘉一郎の茶会の特徴を明らかにしていきたい。

第一節 「青山好み」

大正七年（一九一八）一一月の「初陣の茶会」を例にとれば、茶会に招かれた茶客が先ず目にするのは寄付の飾付であり、次いで床の掛

物、釜、後座に入って花入、拝見に出される茶碗、茶器、茶杓の順である。さらに、根津嘉一郎の茶会では茶事終了後、広間などで自慢の名器の飾付が披露されることも多かった。以下、茶会の流れに沿って根津嘉一郎の茶道具類の使用状況を検討していきたい。

第一表は「飾付」と「掛物」を、大正元年（一九一二）から四年目ごとに区分した使用状況である。ただ、この時期区分は比較する年数を等しくするための措置であり別段の意味はないが、参考までに示した各期間ごとの茶会数の違いは念頭に置くべきであろう。なお、茶道具類の数詞は、書画や墨蹟は幅、茶器は個、茶碗や釜は口、茶杓は本を用いなければならないが、煩雑さを軽減するためにすべて「点」とした。

ところで、大名物の牧谿筆「竹に雀」は、昭和四年（一九二九）一二月の「歳暮茶会」では茶事終了後に動座した八畳広間の床に（9）、同一四年一二月の「歳暮茶会」では書院の薄茶席の床に掛けられていた（10）。同じく大名物の牧谿筆「蓮燕図」は、昭和二年一二月の「歳暮茶会」では茶事後の広座敷の床に（11）、同五年四月の「大師会」では神齡山護国寺の不昧軒の床に掛けられていた（12）。厳密に言えば、広間などの「飾付」と床の「掛物」として個別に集計しなければならぬが、ここでは煩雑さを軽減するために、「飾付」は大きく硯

（第1表）掛物・飾付の使用状況

	大正1年～	5年～	9年～	13年～	昭和3年～	7年～	11年～	合計	
飾付	点	点	点	点	点	点	点	点	%
硯箱		2	3	6	1	3	5	19	29.2
屏風		1	2	2	1	4	15	23.1	
香炉			6	2	2	1	14	21.5	
荷箱			5	1	1	1	3	4.6	
手鑑				1	1	1	2	4.6	
その他							9	3.1	
小計		4	16	10	4	1	16	65	13.8
掛物		4	16	10	15	4	16	65	100.0
古画	1	2	7	3	13	4	12	42	36.2
墨蹟		1	9		5	1	3	19	16.4
消息			2	4	3	3	2	15	12.9
賞状				2	5	3	3	13	11.2
色紙		2	2	3	3	1	2	13	11.2
唐絵			2	3	4	1	4	13	11.2
小計	1	5	22	15	34	13	26	116	100.0
合計	1	10	35	25	49	17	41	181	
茶会数	1	2	13	7	14	6	8	51	

箱、屏風、香炉、筆筒、手箱、手鑑と、太刀や兜などのその他に、床の「掛物」は古画、墨蹟、消息、画賛、懐・色紙、唐絵にグルーピングした区分に従ってカウントした。

「飾付」は六五点であるが、硯箱が一九点で首位に立ち、茶会数にもよるが、昭和三年～六年にかけてピークがあるものの、全期間を通じてほぼ万遍なく使用されている。一方、屏風は大正九年～一二年と昭和一一年以降に集中的に使用されている。ところで、硯箱と屏風の使用回数は逆相関にあり、同時に使用されることは少なかったであろう。なお、硯箱と屏風で「飾付」の延べ使用数の半ばを超え、これに香炉の一四回を加えると「飾付」の七三・八パーセントにも達する。これに対して筆筒、手箱、手鑑の使用頻度は少ない。なお、「飾付」は総点数でも掛物の半分であり、「飾付」は必ずしもすべての茶会で行われていたわけではなかった。

(第2表) 釜の使用状況

	大正1年～	5年～	9年～	13年～	昭和3年～	7年～	11年～	合計	
	点	点	点	点	点	点	点	点	%
芦屋金	1		5	2	6	1	2	18	29.5
天明金		1	7		1	1	3	14	23.0
与次郎金		2		2	3			6	9.8
寒雉金			1		2		2	5	8.2
大西金				2	1			3	4.9
新道金			1				1	2	3.3
その他				3	1	3	3	11	18.0
合計	1	3	15	9	15	6	11	61	100.0
茶会数	1	2	13	7	14	6	8	51	

「掛物」では古画が四二点と全体の三分の一を占めて、やや突出はしているものの、「飾付」ほどの偏りは見られず、大正一三年以前には登場していない。画賛を除いて全期間を通じて、ほぼ万遍なく使用されている。これは根津嘉一郎の「掛物」の蒐集が多様性をもっていた現れといえるであろう。しかし、やや細かくみると、墨蹟は大正九～一二年に全体の半数が集中し、古画は昭和三～六年と同一一年以降の二つの山が存在する。また、消息は大正一三～昭和六年に半分か登場している。

第二表は釜の使用状況である。なお、大正

五～八年で茶会数が二回であるのに対して使用釜数は三点と異なっているのは、大正七年十一月の「初陣の茶会」において濃茶席では「土佐光信下絵野馬地紋大芦屋釜」を使用し、薄茶席では「天猫糸目」を使用しているが⁽¹³⁾、同八年六月の「加州土産の披露茶会」では「天猫尾垂」のみを使用して⁽¹⁴⁾、薄茶は略されたためである。また、大正一〇年一二月の「歳暮茶会」のように、濃茶席と同席での薄茶点前があった場合は釜の使用は⁽¹⁵⁾、もちろん、一点とカウントしてある。なお、「天猫釜」は「天明釜」に統一した。

「芦屋釜」が全体の三割を占め、二三・〇パーセントの「天明釜」を加えると半ばを超える。「芦屋釜」は大正五～八年と昭和三～六年に二つのピークを持っている。これに対して、「天明釜」は大正九～一二年に集中的に使用されているのに、茶会数では一回と多い昭和三～六年には一回の使用に止まり、「与次郎釜」や「寒雉釜」を下回っている。

なお、同期間は「薪釜」を除いた七種類の釜が使用されており、バラエティーに富んでいた。

第三表は花入の使用状況である。ここでは材質によって大きく「竹木」、「陶磁器」、「金属」に三つに区分し、さらに、例えば、「陶磁器」は青磁、信楽、伊賀、備前、呂宋などに細区分した。ただ、昭和五年四月の「大師会」の「南蛮細 銘若楓 細川三斎銘」⁽¹⁶⁾と、同八年八月の「新庵茶会」での「元

(第3表) 花入の使用状況

	大正1年～	5年～	9年～	13年～	昭和3年～	7年～	11年～	合計	
	点	点	点	点	点	点	点	点	%
竹木									
竹木瓢			6	1	2	1	3	12	22.6
その他		1		2	1	1		4	7.5
陶磁器		1	6	4	5	2	3	21	39.6
青磁			3	1	1		2	6	11.3
信楽			1			1	1	5	9.4
伊賀				2	1			3	5.7
備前						1		3	5.7
呂宋		1				1		1	1.9
金属	1		6	2	2	3	4	18	34.0
砂張				1		2		6	11.3
古銅				1	3		2	4	7.5
鍍金		1		1				2	3.8
不明				3	3	2	2	12	22.6
合計	1	2	13	9	11	8	9	53	100.0
茶会数	1	2	13	7	14	6	8	51	

伯宗旦 釣瓶」(17)は材質が判明せず、ひとまず、不明とした。なお、昭和三〇六年にかけて茶会数に比して花入数が少ないのは、昭和四年四月の「籌庵慰勞会」(18)、同五年六月の「夜話会」(19)、同六年五月の「燕子花屏風賞翫会」(20)の「茶会記」には花入が記載されていないかったことに起因する。

三区分では「竹木」が三九・六パーセントで、三四・〇パーセントの「陶磁器」をわずかに抑えて首位に立っている。なお、その六割は佗び道具の竹の花入である。ちなみに、竹花入では「一重切」を八回、「二重切」を一回使用している。「陶磁器」では青磁、信楽の順である。青磁では昭和二年五月に堀田正恒伯爵家入札会で落札した「青磁筍花生」が四回となっている。信楽では「信楽耳付」の三回、伊賀では「伊賀銘旅枕」の二回の使用が目につく。「金属」では中興名物「砂張舟 銘ひらた」が三回の使用で「信楽耳付」と並んでいる。

第四表は茶碗の使用状況である。茶碗は亭主の好みも色濃く反映するが、多様性をもち、使用頻度が少ないからといって軽視できず、区分するのは容易ではない。ここでは大きく「高麗」、「和物」、「唐物」に三区分し、さらに細分化した。このため「高麗」は二〇種、「和物」は一四種、「唐物」は二種と全部で三六種にもなってしまった。薄茶々碗としての使用は括弧を付して、濃茶々碗と区別した。なお、並べ順は三つの区分の中で多い順、同数の場合は使用時期が早い順に並べた。

「高麗」が五二・三パーセントと、「和物」の四三・一パーセントを一〇ポイントほど上回っているが、この二つで使用茶碗の九五・四パーセントと圧倒的な割合を占めており、「唐物」の使用比率は四・六パーセントに過ぎない。『青山莊清賞』や次稿『青山莊清賞』の世界」で掲示した第一表「茶道具購入状況」によれば、根津嘉一郎が「曜変天目茶碗」や「灰被天目茶碗」といった天目茶碗を所持していることは

(第4表) 茶碗の使用状況

		大正11年	5年～	9年～	13年～	昭和3年～	7年～	11年～	合計									
高麗	堅手		点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点					
	刷毛目			1	1	(1)	2	(1)	1	3	6	(1)	7					
	井戸				1		2		(1)	6	3	(3)	6					
	絵高麗				1		1			6	6		6					
	斗々屋				1		1		1	5	5		5					
	雨漏				1	(2)	1		(1)	5	5		5					
	御本				1	(3)	2		(1)	3	(1)	4	4					
	柿の蒂				2					3	(4)	4	3.7					
	熊川				1			1		3		3	2.8					
	三島					1			1	3	3	3	2.8					
	割高台				1		1		1	1	(2)	3	2.8					
	彫三島		1							2		2	1.8					
	彫引			1						1		1	0.9					
	五器			1						1		1	0.9					
	金海					1				1		1	0.9					
	伊羅保					1				1		1	0.9					
	和物	古雲					(1)					(1)	1	0.9				
燕麥								1				1	0.9					
手				2						1		1	0.9					
堅手				(1)	10	(6)	7	(4)	9	(4)	5	(1)	8	(1)	41	(16)	57	52.3
刷毛目						(8)	(2)	(1)	(1)	1	(1)	1	(1)	2	(14)	16	14.7	
井戸						(2)	(1)		(2)					1	(5)	5	4.6	
絵高麗										(1)				1	(3)	4	3.7	
斗々屋					1				1			2		4		4	3.7	
雨漏					2				1					3		3	2.8	
御本						(1)							1	(1)	2	1.8		
柿の蒂							1						1	(1)	2	1.8		
熊川						(1)							1	(2)	2	1.8		
三島						(1)							2		2	1.8		
割高台											(1)		1	(1)	2	1.8		
彫三島													1	(1)	2	1.8		
彫引													1	(1)	2	1.8		
五器													1	(1)	2	1.8		
金海												2		2	1.8			
伊羅保													(1)	1	0.9			
古雲													(1)	1	0.9			
燕麥													(1)	1	0.9			
手													(1)	1	0.9			
唐物	祥瑞		1	(1)	3	(13)	1	(5)	2	(6)	3	(4)	4	(3)	15	(32)	47	43.1
	青磁			(1)	1				1		1		1	(1)	2	(2)	4	3.7
合計		1	(1)		1		1		1		1	(1)	1	(1)	3	(2)	5	4.6
集会所		2	2	(2)	14	(19)	9	(9)	11	(10)	9	(5)	13	(5)	59	(50)	109	100.0

なくなる。なお、使用頻度が「高麗」のなかで一番多かった堅手は、昭和三年以降になって集中的に使用されており、三島の登場も昭和期に入ってからである。

「高麗」とは逆に、「和物」は濃茶々碗より薄茶々碗としての使用が圧倒的に多く、使用した茶碗では最多の一六回登場する楽焼は一回までが薄茶席における使用である。同様に複数回使用されている高取、京焼、織部も薄茶席での登場である。一方、志野、伊賀、伯庵は濃茶々碗としてのみ利用されている。使用回数にもよるが、全期間を通じて間断なく使用されているのは楽焼のみであり、高取の使用が大正九年から昭和六年にかけてやや集中していることが読み取れる。

第五表は茶器の使用状況である。普通、茶器とは薄茶器を指すが、ここでは濃茶用の「茶入」と薄茶用の「棗」に区分した。ちなみに「茶入」は一三種、「棗」は一〇種に分類できた。濃茶用の「茶入」と薄茶用の「棗」の使用頻度を比べても意味はないので、それぞれについて百分比を計算した。

(第5表) 茶器の使用状況

	大正1年～	5年～	9年～	13年～	昭和3年～	7年～	11年～	合計	
茶入	点	点	点	点	点	点	点	点	%
古瀬戸				1	3	2	2	8	18.6
瀬戸後窯						1	1	2	4.0
瀬戸所		1	3		2		1	5	11.6
唐物			2					2	4.0
薩摩					2	2		4	9.3
金草山							1	1	2.3
真中古窯			1		1			2	4.0
瀬戸破風						1		1	2.3
赤絵			1					1	2.3
伊部			1					1	2.3
島物				1				1	2.3
座								1	2.3
宗意耳付								1	2.3
時絵	1	1	13	6	9	6	8	43	100.0
茶器	1	1	3	2	3	2	2	12	34.3
竹			1		2			3	8.6
中事			1	1	1	2		4	11.4
一閑張			1	2			1	3	8.6
黒棗		1	1					2	5.7
小棗			2			1		2	5.7
独楽				1				2	5.7
木地					2			2	5.7
吹雪			1					1	2.9
合計	2	3	10	6	8	3	3	35	100.0
茶会数	1	2	13	7	14	6	8	51	

「茶入」は産地によつて唐物、島物、和物に分けられるが、唐物は四点、島物は一点と少なく、圧倒的に和物が使用

されている。古瀬戸、瀬戸、瀬戸後窯の三種で全体の四五・二パーセントに達し、金華山、真中古窯、瀬戸破風を加えると和物茶入の主流である瀬戸で六割を超える。唐物は四回しか使われていないが、具体的にみると、大名物「白玉文琳」は大正七年十一月の「初陣の茶会」(21)と大正一〇年十一月の「東山大茶会」(22)の二回、大名物「松屋肩衝」は昭和十一年一〇月に開かれた「昭和北野大茶会」(23)、田安德川家伝来の「志賀茄子」は大正一二年十一月の「亡災会」(24)で使用しており、昭和北野大茶の湯を記録した高橋義雄が「席主(根津・齋藤)が三百五十年を隔て、遙に豊太閣に呼び掛け、イザ御相手仕らんと罷り出たる意気の閃きを見るべく」(25)と書くように、ここぞという場面が登場している。

「棗」では三分の一の時絵が占めており、これに薬器と竹棗を加えると五七・一パーセントに達する。一閑張、黒棗

(第6表) 茶杓の使用状況

	大正1年～	5年～	9年～	13年～	昭和3年～	7年～	11年～	合計	
	点	点	点	点	点	点	点	点	%
小堀遠州			2	2	1		2	7	9.6
片桐石州			2	2	4		1	7	9.6
織田道八	1		1		1	1	1	6	8.2
元伯宗旦		1	2	1	1			6	8.2
利休			4	1			1	6	8.2
藤村唐軒			2		1	1		4	5.5
阿弥光甫			1				1	3	4.1
本屋宗古				1	1			3	4.1
原叟宗左			1	1	1			2	2.7
仙叟宗室				1				2	2.7
松平治郷			1					1	1.4
佐久間将監				1				1	1.4
桑山左近				1				1	1.4
如心斎宗左					1			1	1.4
沢庵宗彰					1			1	1.4
古田織部					1			1	1.4
細川三斎					1			1	1.4
高橋帶庵					1			1	1.4
江岑宗淳						1		1	1.4
少庵宗淳						1		1	1.4
足利義政						1		1	1.4
象牙		1	5	4	2	2	2	16	21.9
合計	1	3	21	13	17	8	10	73	100.0
茶会数	1	2	13	7	14	6	8	51	

第六表は茶杓の使用状況である。象牙を除き、作者によつて区分したが、茶杓の作者は二人が登場する。ただ、一人の作った茶杓は一回の使用に止まる。小堀遠州と片桐石州が七回ずつで

(第7表) 複数回使用道具一覧

		回数
飾付	鎌倉時代春日山蒔絵硯箱	2
	光琳筆 燕子花図屏風	2
	小形青磁袴腰香炉	2
	黄瀬戸獅子香炉	2
	裂手襷帖	2
		2
掛物	李通筆 瓜虫横物	3
	松花堂筆 大津馬 沢庵賛	3
	元伯宗旦西賛「餅搗の文」	3
	梅麟筆 山水夕陽図	2
	牧溪筆 竹に雀	2
	牧溪筆 通燕図	2
	光悦 日蓮上人詠歌	2
	春屋円鑑国師一行 長上幅	2
	清巖和尚「青山緑水」	2
	元伯宗旦「除夜の文」	2
	利休狂歌入消息	2
	西行筆 落葉切	2
	俊頼圓筆 子の日歌切	2
		2
		2
		2
		2
金	古芦屋 広口釜	2
	古芦屋 四方	2
	九兵衛作 四方	2
	薪釜	2
	与次郎作 肩くぼみ	2
花入	与次郎作 四方	2
	古芦屋	2
	青磁筍花生	4
	砂裏舟 銘ひらた	3
	信楽耳付	3
	遠州作 寂竹一重切	2
	一重切竹 銘三井寺	2
	伊賀 銘旅杖	2
		2
		2
茶碗	祥瑞水玉 在銘	4
	柿の帶 銘滝川	3
	古三鳥 銘上田	3
	長崎堅手	3
	堅手 銘東雲	3
	青井戸 銘鳴戸	2
	絵高麗梅鉢	2
	古井戸 銘忘水	2
	信楽 水の子	2
	仁清鉄仙模様	2
	遠州高取切形	2
	伯庵	2
		2
		2
茶器	新兵衛作 銘空也	4
	青貝薬器	3
	正意作 銘六祖	3
	古瀬戸 銘節季大海	3
	古瀬戸 大鳥	3
	白玉文琳	2
	芽張柳中裏	2
	元伯宗旦在判 一閑東	2
	小川手 銘花染	2
	薩摩焼 銘亀の尾	2
	利休書判 時代木地中次	2
	薩摩焼 銘後藤	2
茶杓	小堀遠州 共筒	5
	片桐石州 共筒 銘時鳥	4
	千利休 銘松本	3
	織田道八 共筒	2
	原叟宗左 共筒 銘伯藏主	2
	仙叟宗室 共筒 銘物忘れ	2
	元伯宗旦 共筒 銘一剣	2

「松飛驒様」とある茶杓「遠州作 共筒」の五回で、高橋義雄も「無銘ではあるが作行は流石に結構であった」(27)とし、昭和六年四月の第三回遠州会では、中興名物の「敷島大海」茶入、「古井戸 忘水」茶碗とともに用い「遠州縁故品中の逸品」(28)と激賞している。これに堀田正俊が江戸幕府四代将軍徳川家綱から拝領した花入である「青磁筍花生」と、茶碗の「祥瑞水玉 在銘」、茶入の中興名物新兵衛作「瓢箪形 銘空也」の四回が続く。しかし、六九・四パーセントの四三点は二回の使用に止まっている。なお、三回使用は一四点であった。

そこで前掲した第一―六表での飾付・掛物、

並び、織田道八、元伯宗旦、千利休の六回がこれに次ぐ。千利休をはじめ、小堀遠州、片桐石州、足利義政、松平治郷、佐久間将監、古田織部といった余りにも有名な大茶人の名前が並ぶなかにあつて高橋箒庵が登場することは、根津嘉一郎の茶の湯の「後見人」としての面目躍如たるものがある。ちなみに、高橋義雄作の茶杓「箒庵翁共筒 銘青山」は昭和三年九月の「大正名器鑑告成会」(26)に際して根津嘉一郎が寄贈した薄茶席で使用された。根津嘉一郎と高橋義雄の茶の湯を通じた強い結び付きを象徴しているといえる。

以上は、茶道具を総体としてみたもので、個別的な道具にはほとんど触れることが出来なかった。そこで複数回使用された道具類に限って書き上げたのが第七表である。

六二点を数える複数回使用された道具のなかで最も使用頻度が多かったものは、小堀遠州の旧大聖寺藩前田家への寄贈を意味する筒に

花入、釜、茶器、茶碗、茶杓などの使用合計数から第七表に登場する複数回使用道具のウエイトを算出すると、最も高いのは三九・〇パーセントの茶器であり、次いで三〇・二パーセントの花入が続き、最も低いのは一六・一パーセントの飾付である。掛物、釜、茶碗、茶杓は軒並み二〇パーセント台である。この数値は使用された道具類のほとんどが五一回の茶会で一回のみの使用であつたことを意味する。言い換えれば、根津嘉一郎の茶道具類のコレクションが如何に豊富であつたのかということを逆照射している。高橋義雄も「茶会記」の機会あるごとに以下のように繰り返して述べている。

何れも名残若くは歳暮茶会の適品のみにて、当庵主は歳暮茶会を八回までも継続し来りて、尚ほ此等適品の種切れと為らざるは、其宝蔵に如何に寂物の潤沢なるやを証するに足る(昭和二年二月「青山歳暮」(29))

庵主の歳暮茶会が既に九回に及んで、其器物の愈よ出で、弥々珍に、毎回新規の器物ばかり取出されて、然も其種の容易に尽きさうもなきは殆んど不思議のやうなれども、目の寄る所に玉が寄るの譬に洩れず、機敏なる道具商等は庵主の歳暮茶癖を見込みて夫れく適品を持込むが為め、歳暮用具が斯く無尽蔵なのであらう(昭和三年二月「龍尾茶会」⁽³⁰⁾)

以上一打茶会の道具組を通覧する者は、茶会の代表道具たる六種中各会に再度出現した者が僅々数点に過ぎざる事を発見するであらう。而して六種だけにして既に斯くの如く豊富なるを見れば、茶会を構成する全部の道具の如何に多種多様なやは、容易に之を推想する事を得やう(昭和六年二月「歳暮茶会」⁽³¹⁾)

中興名物膳所焼大江茶入は、雲州家伝来、不昧公の遺愛であるが、文化年中公の催された茶会記中に、此茶入と藤浪花入とを使用せられた記事があるのに、今度百数十年振りて、再び両器が初風炉の席に對顔したのは、誠に面白き遭遇で、両器も互に其再会を喜びたる事であらう。而して之に配した志野茶碗は普通のと其趣を異にし、鼠地に白く亀甲紋及び檜垣地紋を現はし、何人の筆にや箱に五月雨の一首があるのは、此場合に於て一層其適品たるを知るに足る。其上茶杓は寄付の添文にて明かなるが如く、石州共筒銘時鳥で、右三器の組合せの外、糸目の鮮明なる南蛮メ切建水など悉く千両役者の顔揃ひで、今回濃茶的一幕は、実にアンコールに値ひする程の出来茶であつた(昭和一二年五月「青山斑鳩庵初風炉」⁽³²⁾)

なお、昭和二年一二月の「青山歳暮」に登場して高橋義雄に歳暮氣分を催させた「青磁の油皿に同様の燈心押へで、其上より油皿をのぞいて居る銅製の鼠の口より油がポト／＼と滴り落つる工夫面白」⁽³³⁾

い時代「鼠短髻」を、昭和五年を除き同六年まで毎年のように使用している。前掲の複数回使用された道具類を書き上げた第七表でも、これを超えるのは五回の「小堀遠州共筒 筒に松飛驒様」の茶杓のみで、「青磁筍花生」、「祥瑞水玉 在銘」茶碗、中興名物「新兵衛作 銘空也」の瓢箪形茶器、「片桐石州共筒 銘時鳥」茶杓などの四回と並び使用頻度は高い。根津嘉一郎のお気に入りの道具と考えられる⁽³⁴⁾。

第二節 『大正名器鑑』と根津嘉一郎

高橋義雄(籌庵)の『大正名器鑑』は、近世における享保期の松平乗邑の『三冊名物記』や寛政期の松平治郷(不昧)の『古今名物類聚』に倣ったもので、茶道具のうちの大正期に現存する「茶入」と「茶碗」を全国にわたって調査し、「茶入」四三六点と「茶碗」四三九点について写真に次いで名称、寸法、付属物、古資料、伝来、実見記などを載せた図録である。茶道具の「国勢調査」ともいわれている。高橋義雄が「謝恩記」に、

茶人として、利休よりも遠州よりも、松平乗邑よりも同不昧よりも、幾倍多数の名器を実見する事を得たるは実に畢生の幸慶にして、此点に至りては茶事開創以来余が第一人なりと誇るも決して過分に非ずと信ず、而して此等未曾有の眼福を専有し⁽³⁵⁾

と、千利休や小堀遠州よりも多くの名器を実見したと書いているように、『大正名器鑑』の刊行は明治四四年(一九一一)に王子製紙専務取締役を辞して実業界を去った後のライフワークとした事業のひとつであった。事実、大正元年(一九一二)より取り掛かり同一五年一二月によりやく完成にこぎつけた。文字通りの「大正名器鑑」である。とりわけ、調査後の大正一二年九月に突発した関東大震災の際に失わ

(第8表)『大正名器鑑』集計表

収録点数	所蔵先数			
	旧大名・旧公家	寺社・博物館	家	
90点以上	1	1	1	*松平直亮(63,27) 益田孝(17,20) 鴻池善右衛門(12,22), 藤田平太郎(12,22), *前田利為(21,11), *酒井忠正(15,15) 岩崎小彌太(17,10), *酒井忠道(19,7), 馬越恭平(8,17) *徳川義親(11,12)
35点以上	1	1	1	
30点以上	4	2	2	
25点以上	3	1	1	
20点以上	1	1	1	
15点以上	6	1	1	高橋義雄(8,11), *徳川家達(13,5), 藤田徳次郎(4,13), 井上勝之助(9,7) 加藤正義(4,12), 村山龍平(8,7)
10点以上	10	3	3	*松浦厚(9,5), 藤田彦三郎(4,10), 根津嘉一郎(5,9), 三井八郎右衛門(5,8) *細川護立(6,6), 三井高保(4,8), *浅野長勲(7,4), 住友吉佐衛門(7,4) 松岡忠良(3,8), 藪内紹智(3,8)
9点以上	1	1	1	三井守之助(5,4)
7点以上	3	1	1	近藤滋弥(3,4), 野村徳七(4,3), 龍光院(4,3)
6点以上	4	1	1	小松輝久(6,0), *徳川頼倫(5,1), 森岡彦(3,3), 田村市郎(4,2)
5点以上	5	1	1	*島津忠重(5,0), 磯野良吉(1,4), 阪上新治郎(1,4), 平瀬三七雄(2,3), 益田信世(2,3)
4点以上	8	2	2	
3点以上	18	4	4	
2点以上	24	4	4	
1点以上	65	10	6	
合計	154	31	8	

括弧内の数値は前が茶入、後が茶碗。
* = 旧大名家、旧公家

れた器物もあり、資料的な価値は極めて高い。『箒のあと』によれば、『大正名器鑑』に収録された茶入のうちで一五点、茶碗の八点が焼失したという(36)。「大正名器鑑」をもじって「大将眼利かん」と揶揄する向きもあつたようだが、ここでは「茶入」と「茶碗」のコレクターとしての根津嘉一郎を位置付ける素材として利用するので、高橋義雄の収録基準や評価は問題としていない。

第八表は『大正名器鑑』で判明した八カ所の寺社と博物館(37)をふくむ一五四の所蔵者別の収録点数の集計表であり、旧大名や旧公家と寺社・博物館については再集計して別掲しておいた。したがって、旧大名や旧公家と寺社・博物館を除いた一五家が民間での所蔵者ということになる。なお、収録点数が五点を超える所蔵者については名前と「茶入」と「茶碗」の収録点数を括弧内に表示しておいた。収録点数が九〇

点にものぼる松平直亮伯爵を例にすれば、収録点数の内訳は「茶入」が六三点、「茶碗」が二七点であつた。大茶人といわれた松平治郷(不昧)の末裔であるという貫禄とでもいえるか。なお、旧大名と旧公家にはアステリクスが付してある。京都大徳寺の塔頭である龍光院を除いた名前が挙がっている三八家が「茶入」と「茶碗」の有力な所蔵者ということになる。なお、旧大名層を除いた地域的な分布は、東京府が三八人、大阪府が二八人、愛知県が一七人、京都府が一六人、石川県が八人で、茶の湯における「五都」と称されたことと対応しているだろう(38)。

収録点数九〇点の松平直亮については触れてあるが、それに加えて前田利為、酒井忠正、酒井忠道、徳川義親、徳川家達、松浦厚、細川護立、浅野長勲、徳川頼倫、島津忠重の一家が旧大名家である。全体でみると二〇・一パーセントが旧大名や旧公家であつたが、収録点数五以上の上位所蔵者においては二八・九パーセントとさらに上昇する。高橋義雄のいう「名器が徳川時代を通じて最も資力の充実した国持大名家に保存された」(39)という記述を裏付けている。しかし、「茶入」一七点と「茶碗」二〇点で益田孝(鈍翁)が第二位を占め、鴻池善右衛門(香雪庵)、藤田平太郎(江雪)、岩崎小弥太、馬越恭平(化生)らの実業家が二〇点以上者を旧大名家と二分しているのは近代以降における道具移動が激しかったことを象徴しているだろう。その多くは著名な近代数寄者である。

さて、根津嘉一郎(青山)は「茶入」五点と「茶碗」九点で、全体では一九位、近代数寄者としては三井八郎右衛門(宗恭)、三井高保(華精)、住友吉左衛門(春翠)などの財閥の当主クラスを抑えて一二位に位置している。ちなみに、根津嘉一郎よりも上位に位置する近代数寄者は、すでに名前の挙がっている五人に加えて高橋義雄、藤田徳

次郎（耕雪）、井上勝之助、加藤正義（欽堂）、村山龍平（玄庵）、藤田彦三郎である。なお、井上勝之助は井上馨（世外）の、藤田平太郎、藤田徳次郎、藤田彦三郎の三兄弟は藤田伝三郎（香雪）の後継者であった。

近代数寄者の世代でみると、根津嘉一郎の上位に立っているのは第一世代や第二世代に属する近代数寄者か、その後継者である。根津嘉一郎と同じ第三世代で根津嘉一郎を凌いでいるのは高橋義雄一人だけであり、これは『大正名器鑑』の著者であることを割り引いて考える必要があるだろう。ともかく、根津嘉一郎は旧大名や近代数寄者に伍して名だたる「茶入」と「茶碗」の有力な所蔵者の一角を占めていたのである。

これだけではない。『大正名器鑑』と筆者の構築した根津嘉一郎の使用した「茶入」と「茶碗」のデータベースを突き合わせるることによって『大正名器鑑』刊行以降の「茶入」と「茶碗」の移動状況を確認で

(第9表)「大正名器鑑」と「青山荘清賞」との関係

	名称	銘	根津嘉一郎	松平直亮	酒井忠正	前田利為	藤田平太郎	島津忠重	徳川建孝	高橋義雄	井上勝之助	田村市郎	中山佐市
茶入	文琳	白玉	1										
	瀬戸大海	敷島	2										
	瀬戸	正木	3										
	正意	雪柳	4										
	瀬戸大海	大鳥	5	1									
	瀬戸大海	節季	2										
	瀬戸面取手	彩色	3										
	瀬戸玉柏手	村雨	4										
	瀬戸口広手	大筒	5										
	瀬戸凡手	撰肩	6										
	瀬戸二見手	大江	7										
	瀬戸摩	大即	8	1									
	瀬戸丸壺	尾石	9										
	瀬戸丸壺	河板	10			1							
	瀬戸生海鼠手	松屋	11					1					
	雨漏	後藤	12							1			
茶碗	雨漏	衰虫	6										
	小井戸	忘水	7										
	青井戸	瀧川	8										
	柿の蒂	瀧川	9										
	刷毛目	雪月	10										
	絵高麗	雪月	11										
	志野	山の端	12										
	清野	結熨斗	13										
	信楽	水の子	14	8									
	堅手	長崎	9										
	雨漏	上田	4										
	雨漏	柴田	5										
	伯庵	優曇華	2									1	
	青井戸	涼及	1										1
	青井戸		1										1
合計			14	9	5	2	2	1	1	1	1	1	1

きる。

第九表は『大正名器鑑』に収録された根津嘉一郎の「茶入」と「茶碗」、さらには昭和期における移動状況を示したものである。例えば、『大正名器鑑』においては松平直亮が所蔵していた中興名物の「瀬戸大海茶入 銘大鳥大海」は、筆者が構築したデータベースによれば昭和三年（一九二八）一二月に開かれた「龍尾茶会」〔40〕に登場しており、この間に根津嘉一郎の所有に帰したと考えられる。ちなみに、「瀬戸大海茶入 銘大鳥大海」は昭和九年一二月の「歳暮茶会」〔41〕と同一三年一一月の「安楽会」〔42〕でも用いられている。

根津嘉一郎が所蔵して『大正名器鑑』に収録された「茶入」は、「文琳 白玉」、「瀬戸大海 敷島大海」、「瀬戸 正木」、「瀬戸 雪柳」、「正意 六祖」の五点であり、「茶碗」は「雨漏 蓑虫」、「小井戸 忘水」、「青井戸 鳴戸」、「井戸 宗及」、「柿の蒂 瀧川」、「刷毛目 雪月」、「絵高麗」、「志野 山の端」、「仁清 結熨斗」の九点であった。

その後、松平直亮家から九点、姫路藩主酒井宗雅の末裔である酒井忠正家から五点を譲り受けたのははじめ、前田利為と藤田平太郎の両家から二点ずつ、さらには、すでにみたように島津忠重家の「松屋肩衝」茶入を馬越恭平と争って落札するなど、一〇家から二四点の「茶入」と「茶碗」を入手している。その結果、根津嘉一郎は『大正名器鑑』に収録されていた「茶入」と「茶碗」を三八点手中に収めたことになる。これは『大正名器鑑』に収録された「茶入」と「茶碗」の四・三パーセントに相当する計算となる。

第三節 道具組み評判記

次ぎに根津嘉一郎の茶会における道具組みを検討していきたい。具

(第10表) データベースのサンプル

年	月	日	席	番号	記事	分類	点数	評価
12	04	28	大師会	01	隠れもなき斯道の猛者勇者、而も斯る晴れの場所たる飾付は初舞台にし て如女也	人物		
12	04	28	大師会	02	(苦行釈迦) 画賛ともに普通のものにして、特に賞詞を呈すべき程のも のならず	道具	単品	不評
12	04	28	大師会	03	又この席にも相応したるものとも見られず	道具	単品	不評
12	04	28	大師会	04	豊富な其所蔵中、特に之(苦行釈迦)を撰み出せるは何故にや、按ず るに釈迦出山の期未だ到らず、方今苦行の最中といへる自家の境を暗示 せしものか、然らば得意即妙の好寓意也	道具	単品	好評
12	04	28	大師会	05	客歳二万余金を投じて、浪華の市に獲たりと称せらるゝ染付叭々鳥の香 合を飾る	道具	単品	
12	04	28	大師会	06	香合の盆飾とは抑もいかに、今初めて拝見にて何と評の仕様もなし、或 は所蔵主が大金を投じたるが為めに大事に取扱いたりとも解すべきや なる訳か	道具	単品	不評
12	04	28	大師会	07	床席には砂張舟の釣花入に白藤を挿む、而も空生にして水を見ず、いか なる眼か	道具	単品	不評
12	04	28	大師会	08	祥瑞水玉の茶碗まづは結構なれど、格別取立てゝ賞するもいかにや	道具	単品	不評
12	04	28	大師会	09	他の物も略々同席にてこの場所この席に最適し、あつと感嘆に堪へざら しむるものなきは、遺憾至極也	道具	組立	不評
12	04	28	大師会	10	庄巻なる叭々鳥の香合あり、来客はこの一品に依り満足して可なるべし	道具	単品	好評

体的な検討に先立って第一〇表を
使用して大正元年(一九一二)四
月の第一六回大師会に東京品川の
御殿山の禅居庵において開席した
際の野崎広太の「茶会記」を例に
データベースの作成手順を説明し
たい。

まず、年月日、席名を記入する。
年は資料の検討作業でのソートの
便を考えて西暦の下二桁とする。
次いで記事の内容のまとまりに
従って順次入力していく。第一〇
表では一〇項目で打ち切ったが、
席名ごとに通し番号を付す。例
えば、床の「掛物」である曾我蛇
足筆「苦行釈迦」に関しては項目
〇二〜〇四と三つに分けた。その
際、項目〇二の(苦行釈迦)のよ
うに、適宜、括弧書きで内容を補っ

(第11表) 根津嘉一郎の道具組み

年月日	会	飾付	掛物	花入	茶	茶室	茶約	茶飾
211226	青山夜話会	又平風 浮世絵六枚屏風	清観宗滑一行「古上右 龍泉」	遠州作 寂竹一重切	芦屋 猿蓑地紋 広 口 時代唐駒蓋付	船岡吹雪堂	利休作共筒 虫喰	茶碗 雨瀬大疵物 坂本周 道順書
230524	無事庵残炉	名物 親手鑑帖	青山谷筆 横物大幅 遠州筆 背面連書 江 雪出舟書	吉藏蜀花入	古天明 丸茶 九兵衛作 四方	尹座口広 小川手 路花染 遠州箱書 山吹時絵重	利休形象牙 象牙	一人茶室 銘可要 斗々屋 一人黒染
241123	夕陽茶会	利休消息 「在中斎短」	東山蘭物 馬麟筆 山 木夕陽図 鳥羽僧正 禽獸遊戯図	古銅象耳 片桐右州 箱書	芦屋 地紋海濱遊馬 半信下絵 胡蝶覆付 大西九郎左衛門作 徳川	中興名物 破風窓本歌 銘 正本 不味公好 秋野時絵重	利休作 銘松本 権十郎筒 象牙	古伊羅保片身替 御本手使 銘紅葉山 小堀深雪箱
260607	青山初風炉		紀貫之筆 寸松庵色紙	南蛮鈔張 平田帶釣	西方釜 利休所持 宗旦箱書	名物 生海鼠手 路深美 唐物 竹施家津口次 元伯宗旦好 一雨張重	遠州共筒 松飛脚様とあり 象牙	中興名物 古井戸 銘忘水 遠州箱書 生々屋小淵 銘筆 珠光青磁 子入蘭作
270826	薪庵茶会		安智禪師自南賛 沢庵 楠筆	嵐早大納言実権写 法師 大谷尊由手作 龍	雲竜 四方小形	唐物 竹施家津口次 元伯宗旦好 一雨張重	利休作 銘龜の尾 片桐右州共筒 銘時局	雨瀬 雲龍平
280522	青山初風炉	西行法師筆 時鳥集切 印 隆筆 布袋 梵石寶	中興名物 真龍岩墨蹟	古銅獅子耳	利休好 与次郎作 四方鬼面覆付	摩羅佛 銘龜の尾		
291026	弘仁堂残茶	淡彩大津絵鬼の念仏図 光長筆 春日曼陀羅 鎌倉 時代絵師父子	松花堂筆 大津馬 沢 庵賛	元伯宗旦作 瓢 銘 般若 如心斎箱書	色紙釜 筒釜 遠州 好 大手取釜	奈良墨瀧 中興名物 新兵衛作 銘空 也 藤重作 竹中次	象牙 古田織部作	古三鳥 銘上田 仁清 鉄仙様 中興名物 長崎堅手 備前小服

る高橋義雄と野崎広太の「目」と「言
葉」による根津嘉一郎の茶会に対す
る評価が蓄積される。

次の段階は、蓄積されたデータを
使用した茶会の検討である。しかし、
茶会の内容が詳しく判明する五一回
もの自会のすべてに言及するのは無
理であり、一定の基準で対象とすべ
き茶会选择する必要がある。ここ
では性格の重複する茶会を避け、道
具組みを中心とした評価に重点を置
いて、なるべく多面的な評価がな
されている茶会を抽出することとし
た。作業を通じて対象となったのは
次の六つの茶会である。

青山夜話会(大正一〇年十二月)、
無事庵残炉(大正一二年五月)、
夕陽茶会(大正一三年一月)、
薪庵茶会(昭和二年八月)、
青山初風炉(昭和三年五月)、
弘仁堂残茶(昭和四年一〇月)、
ただ、昭和元年六月の「初風炉茶
会」は、全体的には好意的な評価が
目立つ高橋義雄の「茶会記」にあっ
て、珍しく「辛口」の文言が並んで
いるので紹介してみたい。なお、七

会の茶会の道具組みの一覧は第一一表に掲示した。上段は濃茶席、下段は薄茶席の茶道具である。偶然にもすべて高橋義雄の「茶会記」の記事であり、いうまでもないが高橋義雄は全部の茶会に出席している。

大正一〇年（一九二一）一二月の「青山夜話会」の発会は東京青山の本邸にある原叟好み三疊半太柱席で開かれた。高橋義雄の同席者は加藤正義（欽堂）、吉田丹左衛門（楓軒）、益田多喜（紫明）、仰木敬一郎（魯堂）の四人であった。なお、高橋義雄の記述に従えば二回目の歳暮茶会である。まず、

此順で行けば歳末の青山夜話会は根津家の年中行事に為りさうである。何方でも年末は百事多忙であるのに、況して根津君の如き活動家が、俗務蠅集の重囲を切抜けて夕刻事務所より帰宅するや、ビジネスコートと十徳姿と早替りするのは中々容易な事でなからうが、茶事の真味は實際此活劇中に在るので、青山君が百忙中に一閑を偷んで、此夜話会を開かるゝ胸中綽々の余裕には大に敬服せざるを得ぬ（43）

と、書いて、「根津コンツェルン」を率いる現役の実業家として多忙中であるにもかかわらず、夕方帰宅すると「ビジネスコートと十徳姿と早替り」して歳暮茶会を開催した根津嘉一郎を高く持ち上げている。次いで、床の蜂須賀家伝来である「清巖宗渭一行 舌上有龍泉」は、心置きない友人の集まりである「今夜の如き夜話会の主客双方に対して誠に適切と思はれた」（44）と誉め、さらに、「雨漏茶碗」、「利休作共筒 虫喰」、「紹陽吹雪棗」の取り合わせを「雨漏茶碗は坂本周齋即ち閑事庵宗信の箱書付で、其大寂びなのが歳暮に真向きなり。利休虫喰茶杓は共筒の外に随流の替筒があつて、比較的重過ぎた様だが、五郎塗と覺しくて黒漆の透き加減が得も言はれぬ紹陽吹雪棗とは如何にも好い配合であつた」（45）と好評価を下している。そして「今度の道具

組合せは庵主の独断で、何人にも相談せぬと云ふ触れ出したが、如何にも素人放れがして居つた」（46）と書いて成功と感服しながらも、次のように「黒幕参謀官」の存在を推測している。

斯も叙味十分なる器物の配合を、茶臘の割合に浅い当庵主が、若し独断で専行し得たとすれば真に後生畏るべしであるが、余に出来過ぎて居るが為め、失礼ながら多少黒幕参謀官の献策が加はつたらうと邪推せざるを得なんだ。併し何れにしても成功は成功で只管感服の外なかつた（47）

事実、大正七年一二月の「初陣の茶会」からまだ三年しか時間が経っておらず、確認できた自会は二回目である。それは「今夜は最初会であり、客と摺れくゝに帰宅して、俄に亭主役を勤めた為め、器物又は懷石に就き客の質問に対してシドロモドロの点が多く、水屋で取調ぶるまで即答を保留するなど中々愛嬌を振り蒔かれた」（48）と書かれている準備不足を露呈した根津嘉一郎の亭主振りを伝える記述からも読み取れる。高橋義雄の「茶会記」には明記されていないが、恐らくは出入りの道具商であり、たびたび、代点者として登場する川部太郎らが関わっていたと考えられる。それはともかく、有力な新人の登場に高橋義雄も次のように手放しで喜びを綴っている。それは根津嘉一郎の亭主評に続く、次の一文からも読み取れる。

先般東山大茶会に閑東方の旗頭として堂々と出馬した当庵主は、同時に住友春翠男の洛東鹿ヶ谷茶会に臨んで、案外の正客振を発揮し、殊の外男の推賞を蒙られたさうで、中毒と云つては少しく語弊があらうが、今や茶氣満身の有様で、歳暮茶会を二度まで継続したやうの次第であるから、今後年々歳々是れが根津邸の年中行事と為る事であらう。昨今東都の茶老漸次凋落して後継其人に乏しき折柄、斯かる熱心と実力とを兼ね併せた青山君の出現は、

誠に人意を強うするに足る(49)

なお、筆者が構築したデータベースによれば、大正一〇年十一月の住友財閥の当主である住友吉左衛門の「口切茶会」での正客が根津嘉一郎としては最初に務めた正客であった。

大正一二年四月の「無事庵残炉」は、財団法人として再発足し、それまで恒例の会場であった東京品川の御殿山にあった益田孝本邸を離れて原富太郎(三溪)の経営する横浜本牧の三溪園を会場にして開かれた大師会への参加者を招く狙いがあった。なお、同年の大師会では根津嘉一郎も第九席聴秋閣を受け持ち、書院において二〇年ぶりに八幡名物「花白河蒔絵硯箱」を披露している(50)。大師会から中一日を置いただけの当日は、上京した大阪の磯野良吉(丹庵)と東山大茶会を主催した京都の洛陶会会長の松風嘉定に、岩原謙三、戸田音一(露綏)が加わった。記録者である高橋義雄が「茶事は会心の友を得て始めて興味を生ずる者であるから、茶人は先づ茶客の都合を考へて、成るべく多く之を羅致するを其策戦の第一義とする」と完全に合致している(51)。この時、根津嘉一郎は持病のリューマチで苦しんでいたにもかかわらず、自ら懷石を運んだという。さて、無事庵の床には大阪の辰巳屋和田久左衛門旧蔵であった黄山谷筆「横物大幅」が掛けられ、「古墨跡に交趾柘榴の香合とありては如何にも正々堂々の陣立で、相客一同俄に正襟せざるを得ず、嚴肅の気分一座に漲」(52)らせ、晩春の軽妙なる趣向を予想していた相客一同の度胆を抜いた。根津嘉一郎の「策略」を読み取ることが出来る。さらに濃茶席や薄茶席の道具組みと茶略も、床には空色滴らんばかりなる青磁筍の尺五寸許もあらんずらん大花入に白牡丹一輪を挿まれたが、黄山谷の墨蹟と対峙する花入は、実に斯くこそあるべけれど一同感歎を禁じ得なかつた(53)(遠州筆背面達磨は…齋藤)小間の墨蹟と対照して軽重其宜しき

を得たのは庵主が苦心の結果と窺はれた。…広間の重荷が尋常でないで、小間の小付を精々軽くした庵主の作略は直に夫れと合点せられた(54)

と、すこぶる好評であり、高橋義雄は「大師会参詣の珍客を迎ふる茶会としては、其御馳走としても又其荒胆を取控ぐ為めとしても、当山第一流の名幅、名器を取出さざる可らずと云ふのであつたらう」(55)と根津嘉一郎の茶略を付度している。だが、その一方で、残炉は軽妙を旨とするとして、「此主人としては如何にも尤も千万と謂はざるを得ぬが、余り結構過ぎて自から口切気分と為り、晩春残炉の茶会には少しく重苦しき感なきを得なかつた」(56)と、一言の苦言を呈しており、今後のためにさらなる研究を希望している。根津嘉一郎の茶の湯の「後見人」を任じている高橋義雄ならではの筆致ではある。

翌大正一三年十一月の「夕陽茶会」とは根津嘉一郎の東京青山にある本邸での斑鳩庵開炉茶会であったが、床に東山御物である馬麟筆「山水夕陽図」が掛けてあつたために高橋義雄が、かく命名した。茶客は高橋義雄、原富太郎、前山久吉(観空庵)、岩原謙三の四客であつた。まず、道具組みに圧倒された高橋義雄は、

夕陽茶会に光信下絵海浜遊馬の釜を掛けられたのは、一軸と対照上斯くなくては叶はぬ事なり。交趾狸香合も亦甚だ適品と云ふべく、其他羽箒、火箸に至るまで何れも第一流を出されたのは、千両役者の組合せに座主の苦心の尋常ならざるを見るべし(57)

と書き、雑器にいたるまでの「千両役者の組合せ」ともいふべき一流品のオンパレードに感服している。そればかりではない中立後、松平治郷(不昧)遺愛の「雲州銅鑼」を聴いて、「夕陽の一軸拝見後、直に之を耳にするのは宛ら山寺の晩鐘を聞くが如き心地して、夕陽茶会に一段の意義を添へ偶発か故意かは姑く問はず、兎に角庵主近來の出

来茶と称して宜からう」(58)と「山水夕陽図」と「雲州銅鑼」との取り合わせを絶賛している。

なお、高橋義雄が記録した大正一三年二月の「聴鉦会」の「茶会記」によれば、前年、雲州松平家伝来の「雲州銅鑼」が入札競売に付された際に高橋義雄も入札したが、数百円の差で根津嘉一郎が落札してしまった。永禄四年(一五六一)九月の川中島の合戦における武田信玄と上杉謙信の一騎打ちではないが、「流星光底に長蛇を逸して仕舞ったのは、遺恨十年位の沙汰ではなかった」(59)と銅鑼運の乏しさを嘆く一方で、落札者が根津嘉一郎と知って大いに安堵する一幕があったという。

さて、「夕陽茶会」の濃茶席の使用道具についても、島原松平忠和子爵家に伝来し、大正七年一二月の入札会で五八、九〇〇円で落札した中興名物「瀬戸茶入 正木」を使用し、「此茶入に取合せた伊羅保片身替茶碗は時代古くして一点の疵なく、色彩の変化も亦頗る面白い：茶入と茶碗に対して利休作銘松本茶杓を配したのは、器物の格式上斯くあるべき筈」(60)と、茶入、茶碗、茶杓の組み合わせを高く評価している。高橋義雄の名器、名品を前にした喜びは「今度の夕陽茶会の如きは往昔の將軍大名と雖も容易に企て及ばざる盛事で、今生斯る茶会に遭遇した余等の幸福は大いに古人に誇るべき者であるから、此点に於て余等は庵主に極めて深厚なる感謝を表しやうと思ふ」(61)という言葉に端的に示されている。さらに、濃茶点前における根津嘉一郎の立ち居振る舞いにも言及し、

青山宗匠も茶臘の重なるに随ひ、善く云へば沈着、悪く云へば横着になつて、濃茶手前に客を呑んで掛るの呼吸は已に免許皆伝の域に達し、今日など初会であるにも拘らず、手前に停電なく碗中に爆弾もなかつたのは天晴大出来と謂ふべく(62)

と、お茶人としての根津嘉一郎の急成長に賛辞を惜しまない。ただ、同席した原富太郎の「茶入、茶碗双方片身替で見た目に色取が相即くから、茶碗を古井戸などにして茶入を今一段引立たせたい」(63)という批評をさりげなく紹介し、「此一評は最も先づ我意を得た者で、感服ばかりが客方の能事でもあるまいから、是れ位の託宣は庵主も辛抱して聞いたが宜からうと思ふ」(64)と茶碗に使用に注文を付けている。この口吻に益田孝とともに根津嘉一郎を茶の湯の世界に誘い、

根津氏が今度初陣茶会を催すに就ては、余は実に煽動者たり、後援者たる功罪両様の責任を負ふ者なり。兎角初陣は登場するまでが肝腎にて一度陣頭に立ちたる以上は、競馬の馬の駆出したるが如く、傍より之を止めんとするも容易に止め得ざる勢を以て、自ら駆出す者なれども、扱て其皮切が容易に非ず、点茶手前や如何、道具組合や如何と兎角登場を躊躇するを否応なしに往生させ(65)大正七年の秋に「初陣の茶会」を開かせて以来何くれと相談に乗り、根津嘉一郎の茶の湯の「後見人」をもつて任じる高橋義雄の真面目が垣間見られるだろう。ただ、同月二日に益田孝や石黒直恵(況翁)と一緒に招かれている「辛口」茶評家の野崎広太が、二畳中板である斑鳩庵の床に馬麟筆「山水夕陽図」を掛けた点について、

その昔、足利義満、義政等が、豪奢を極めて東山の別業に茶会を催し、堂々とその床に掲げたらばこそ、その光彩陸離たりしならむも、惜し哉、かゝる大侘びの席中に披露されては光彩も放たず、責めては金閣銀閣の席中に用ひしやうに、四畳半か六畳の室に展示したらむにはと、その名幅のために少なからず之れを惜み、且庵主が無情を怨みて(66)

と、批判的に「青山茶会 根津嘉翁の催」に綴っていることは紹介しておきたい。さて、筆者の構築したデータベースによれば、根津嘉

一郎は大正十一年（一九二二）から長野県軽井沢にある別荘の麗沢山荘に三疊台目の茶席を開き、高橋義雄は乞われて麗山に對面しているところから薪庵と命名した。なお、麗沢山荘は山県有朋（含雪）の命名によるという（67）。

根津青山翁は東都実業現役将校中一方の重鎮で攻城野戰東西奔走に寸暇なき身なるに、茶事にかけては、余裕綽々で今や東都に於て彼の晩節を茶三昧に托し居る益田鈍翁を除いては、一年中に青山翁程多く茶会を催す紳士茶人は無からうと思ふ。其中にも寒中の自宅歳晚茶会、暑中の軽井沢薪庵茶会は已に根津家の年中行事（68）

となった麗沢山荘の「薪庵茶会」であるが、昭和二年（一九二七）八月は大阪の磯野良吉と、吉田五郎三郎（梅露）と平松常蔵（如雪）の二人の道具商が相客であった。高橋義雄は「扱て今回の薪庵茶会に就ては、昨日益田鈍翁より根津のお茶は薪庵始まつて以来の出来茶であるよと注意せられ、又兩三日前、已に当庵の客と為つた名古屋の富田宗慶翁よりも同様の賞讃を耳にして居た」（69）のである。富田宗慶とは名古屋電気鉄道専務取締役の富田重助であり、名古屋地方を代表する近代数寄者の一人である。事前に耳にしていた益田孝と富田重助の絶賛に違わず、高橋義雄の「茶会記」には以下のような道具組みへの賛辞が並び、その一方で、「大侘名品が余りに揃ひ過ぎて少しく鼻突合ひの嫌ひあり。其中の一品、例へば蓋置などを半枯竹の新物にしたらば却て一段の侘味を増すであらうと思ふのみである」（70）と書きつつも、侘茶人としての根津嘉一郎のさらなる成長への期待を表明している。それは以下の道具評からも明確に読み取れるだろう。

（宏智禅師自画賛は…齋藤）其絵の処が欠損したので沢庵が之を補つた者であるさうだ。而して元のままの宏智禅師自画賛では少しく固苦しき嫌ひがあるが、沢庵の補筆で大侘物となり、今日薪庵

の床に納まつて寸分動かぬ適幅と為つた（71）

（探幽自画賛香合は…齋藤）本来何に生れたる者やら分らぬが、当庵室の香合としては如何にも面白く、殊に其歌中にある木のきれと云ふ一句は後座の掛花入と対照して、愈々其取合せの妙味を感じしめた（72）

庵主が当庵に相応しき器物を取合すにつき、如何に苦心したか分るであらう。信楽水指は火変り面白く殊に其共蓋なるが有り難く、宗旦一閑張棗は古雅なる形で蓋裏に朱漆の宗旦書判があるのを、袱紗包にした意匠が嬉しく、原叟作伯藏主茶杓は例の太作に其力量を見せ、珠光茶碗は了入が破片を樂土で補つたのが大寂びなり（73）

其上に蓋置までも茶屋宗古作立白形で満座悉く侘びの世界ともいふべく、予て侘数寄を以て任ずる益田鈍翁さへ、今度は一言もなく感心したのも自から其いはれなきに非ずである（74）

「根津コンツェルン」を率いて多忙である根津嘉一郎が何時、どのようにしてこれらの名品を選び、長野県軽井沢の別荘に運んだのであろうか。是非とも知りたいところである。ところで、昭和三年（一九二八）四月は、前年に突発した金融恐慌の波を被って甲州財閥の総帥の位置にあった若尾謹之助一族が経営していた若尾銀行が破綻している。昭和三年五月の「青山初風炉」で高橋義雄が、

緑陰幽草花時に勝れるけふこのごろ、東都に茶煙の颯らぬのをもどかしと思ひけん。実業現役闘將として最も多事多忙なる根津青山翁が、五月二十二日を初日として俄に初風炉の一会を赤坂青山邸に開かれたのは、彼の懈怠なる茶界同人に対して如何にも皮肉なる痛棒である（75）

と、書いている背景である。「青山初風炉」は原富太郎、前山久吉、近藤滋弥（其日庵）、加藤正治（犀水）、山澄力太郎（静斎）を高橋義

雄の同席者としており、寄付の壁床に西行法師筆「時鳥集切」が掛けられており大掛かりな茶会であることが予告された。斑鳩庵付属四畳半茶室の洞床には中興名物「真龍岩墨蹟」が掛けられた。道具組みに対して高橋義雄としても、まず、

炭手前器物は、墨蹟に対して一言もなき取合せて、利休好み釜固より宜し。鎌倉時代菊時給香合のケンザリとして、内外共に紋様の鮮明なる又更に佳く、此器物と此取合せては、余等茶評家も唯三拝九拝して無条件降伏するより外なからうと思はれた(76)

と、書かざるを得なかった。希望した通り確かに松平不昧公遺愛の「雲州銅鑪」を聴いて入席した庵主の濃茶手前、さらには同席で饗応された薄茶に用いられた道具組みの品々は次のように絢爛豪華であった。堀田正盛が三代將軍より拝領の伝来ある古銅獅子耳花入に大山蓮華一輪を活けられた風情、前席の墨蹟と相對して、寸分動かぬ取合せであつた(77)

さても今度の一会は、従来の青山茶事中に於て一、二を争ふべき名品揃ひだが、中につき真龍岩墨蹟は雲州家伝来なり。亀の尾茶入、雨漏茶碗、上田三島茶碗は姫路酒井家伝来なり。而して何れも最近入手せられた者なるを、惜気もなく斯く一時に取出されたのは、性急なる庵主が、其悦びを包み切れぬ愛嬌とも云ふべく、夫れかあらぬか、組合上に於ては多少の論点なきに非ざれども、名品は如何にしても名品で、客としては偏に其眼福を謝せざるを得ぬ(78)

これでもかこれでもかという名器、名品を前にしては、流石の高橋義雄としても脱帽せざるを得ない状況にある。次稿「『青山莊清賞』の世界」でみるように、大正五年五月の伊達宗基家人札会を皮切りに、大正期を通じて大々的に行われた旧公家や旧大名家に伝来した家宝の

売り立てにおいて名品を高値で次々に落札する一方で、入札という方法によらずに所蔵者から数々の名品を直接譲り受けた根津嘉一郎の底力を示すものであろう。

さらに、昭和初年に突発した金融恐慌の影響が完全に収まらずに「今年には八釜しい緊縮政策が浮世の外なる茶界にまで影響してか、寂として其音信を聞かぬ」(79)不況の真っ只中にあり、世界恐慌のはじまりであるニューヨーク株式市場で株価の大暴落があった直後の昭和四年一〇月二六日に東京青山の本邸において「弘仁堂残茶」の初日が開かれた。寄付となつた牛部屋形の二畳敷壁床には、「何人の筆にや淡彩の大津絵鬼の念仏の図を掛けられたが、今日の呼物大津馬を本席に掛けんとする其前提として、此処に此一軸を活用されたのは、出合頭に先づ来客の度胆を抜かんとする茶略」(80)で、東都の数寄者が永いこと披露を待ち望んでいた松花堂昭乗筆「大津馬図」の登場を予告するものであった。

松花堂昭乗筆「大津馬図」は明治三四―三五年頃にあつた大阪の逸見家入札会で道具商の春海藤次郎(一樹庵)が藤田伝三郎(香雪)と争つて入手し、明治四〇年頃までに根津嘉一郎に譲られたものといわれる。以来、永いこと秘藏していたために老茶人は終生見ることが出来ないのかとの抗議もあつたという(81)。根津嘉一郎としては満を持しての披露である。茶客は高橋義雄、前山久吉、近藤滋弥、加藤正治、山田保蔵の五人である。本来、名残茶会は飲み残りの茶と秋の寂味を味わうものだが、「大津馬図」の出現によって性格が一変した。高橋義雄も「空也(瓢箪・齋藤)は其銘柄よりして、名残茶会に適役なり。世に瓢箪より駒が出たと云ふ諺はあるが、今度は大津馬に対して此茶入が飛び出したので反対に駒より瓢箪が出たとも云ふべく」(82)と、「大津馬図」を軸にした当日の道具組みを次のように高く評価している。

道具組は名残茶会として聊か御馳走過ぎたるの観がないでもないが、何を言つても庵主が秘蔵の大津馬を引出したからには、シテに対する権衡上、其ワキやツレを疎略にする能はざるは当然の成行で、お世辞抜きにて最上乘の配合と讃嘆する外あるまい（83）

風炉釜を真中にして左に細長き南蛮水指を置き、右にワザト紫袱紗に包みたる名物空也茶入を差置かれたる一事で、是れが席上に一層の侘味を添へ、其上茶入の空也瓢箪が其形と云ひ異ずんだ釉色と云ひ、稍締りたる青白き長崎堅手茶碗と相對して一は和物、一は朝鮮物なるだけ対照の妙得も言はれず、一同コレハと感心して顔見合するばかりであつた（84）

「大津馬図」に相応した、和物の茶入、朝鮮物の茶碗、南蛮物の水指といった名器揃いを前にして、

茶事は名残程面白い者はないが、又是程六かしい者もない。本来飲み残りの残茶と共に晩秋の閑寂を味はんとする者なれば、茶室も器物も将た懷石も、其他一切の趣向も皆此氣分に調和しなくてはならぬ。左れば古来老功茶人ならでは、其妙境に達する事が出来ぬと云はれて居るのも誠に当然の事である（85）

と述べ、根津嘉一郎に対して「青山老宗匠」という尊称すら奉っている。ここにいたつて根津嘉一郎は東都茶界の重鎮たる地位を不動のものとしたといつてよいだろう。

ただ、五三回を数える根津嘉一郎のすべての自会が成功したわけではなく、不評に終わったケースもある。事実、昭和元年六月七日に青山本邸の斑鳩庵で開かれた「青山初風炉」の茶評には、辛辣な茶評で物議を醸すことも少なくなかった野崎広太とは異なつて、温厚な性格によるものであろうか温かみのあるコメントが多かった高橋義雄に於ては珍しく厳しい評価が列記されている。以下、煩を厭わずに紹介し

ておきたい。なお、同席者は大橋新太郎（松翁）、藤原銀次郎（曉雲）、前山久吉、八田富三郎（円斎）の四人である。使用された道具類は高橋義雄が編纂した『大正名器鑑』に掲載された小堀遠州の旧蔵であつたが赤星弥之助、坂本金弥を経て入手した中興名物「古井戸 銘忘水」の茶碗、水野忠美子爵家より高橋義雄を経て入手した名物「生海鼠手 銘深美」の茶入、さらには「遠州共筒 松飛驒様」の茶杓などの名品が並び、高橋義雄も、

今度の茶会は寸松庵色紙、八橋蒔絵香合、砂張釣花入、忘水茶碗、深美茶入等要所々々に千両役者の顔が揃ひ、今年諸方で雨後の筍の如く続出した初風炉茶会中、名器揃ひに於ては蓋し出頭第一なるべく、庵主の得意も嘸かしと推察せらるゝ（86）

と、「千両役者の顔」の勢揃いにはひとまずは兜を脱いでいる。しかし、これに続けて、

他の器物取合せに於ては従来当家で行はれた茶会中最上の出来とは思はれぬ。是れが若し初心茶人ならば大目に看過しても宜い処なれど、当庵主の如きそろ／＼斯道の古老株に近づいた者に対しては、直言も却て一興なるべければ（87）

と、一転して古老株に近づいた根津嘉一郎への厳しい批評が開始された。茶の湯の「後見人」であると任じている高橋義雄はわずかなミスも見逃していない。まず、批判の槍玉に挙げたのが「南蛮砂張 平田帯釣」である。「砂張釣花入の鎖が新調にやあるらん。銀色ピカ／＼として花入を高尚な文金高島田と見立つれば、之れに当世流のリボン結び付けたるやうな心地がした」（88）と道具のバランスの悪さに手厳しい。続けて、初風炉茶会での深美茶入と忘水茶碗の組合せにも批判の目を向けている。高橋義雄はいう。

茶入の深美は無論名品には相違ないが、本来口切氣分の茶入なれ

ば、初夏向きのサツパリした忘水茶碗に対して一対の好夫婦とは受取れぬ⁽⁸⁹⁾

と、道具を使用するにあつたての時期を誤った失敗であると断じている。さらに替茶碗として使用された「斗々屋小服 銘隼」については、斗々屋茶碗で隼と云ふのは加州金沢の村彦兵衛所蔵と聞いて居るが、夫れは定めて隼の如き鋭敏な作行であらうに、是れはシタリ隼どころか鳶にも及ばぬ凡物で、此処に同席さすべき資格がなかった⁽⁹⁰⁾

と、その使用を全面的に否定している。さらに、懷石の食器にも「宋胡録と名乗つて、身元の怪しい徳利の現はれたのも瑕瑾の一つと見ねばなるまい。万曆升の肴鉢も初風炉には少しく重苦しき感じがした」⁽⁹¹⁾と、食器の使用についても厳しい注文を付けている。

従来の「茶会記」とはガラリと異なつて「辛口」の茶評に終始した高橋義雄の意図が奈辺にあつたのかは「茶会記」からだけではハッキリとしない。しかし、「蓋し今度の組合せは主人が俗事多忙に紛れて、聊か細心の注意を欠いた其崇りが、遂に此不調和を来した者であらう」⁽⁹²⁾と、現役実業人としての忙しさにかまけて、お茶人としての用意周到さに欠けた点を厳しく論難しているのである。数寄世界に入るために明治四四年（一九一）に五〇歳にして王子製紙専務取締役のイスを放擲して実業界を引退している高橋義雄の真骨頂であろう。なお、年齢では根津嘉一郎が一歳年長であつた。「無遠慮に之を直言して庵主の参考に供するのが茶友の義務ではあるまいかと」⁽⁹³⁾しているところに根津嘉一郎の茶の湯の「後見人」である高橋義雄の茶の湯に対する厳しさを感ずるのである。良い「師匠」に恵まれた根津嘉一郎は幸せであつたに違いない。

註

- (1) 佐々木三昧『茶の道五十年』(淡交社、一九七〇年)、二二頁。
- (2) 『世渡り体験談』、二四五頁。
- (3) 『男爵郷誠之助君伝』(郷男爵記念会、一九四三年)、七八二～七八三頁。
- (4) 『昭和茶道記』(以下、『昭和』と略記する) 第一巻、六九三～六九四頁。
- (5) 高原富保『近世名茶会物語』(毎日新聞社、一九八五年)、二六五～二七七頁。
- (6) 熊倉功夫『近代数寄者の名茶会三十選』(淡交社、二〇〇四年)、一九六～二〇四頁。
- (7) 鈴木皓詞『近代茶人たちの茶会』(淡交社、二〇〇〇年)、一八九～二〇〇頁。
- (8) 熊倉功夫『近代茶道史の研究』(日本放送出版協会、一九八〇年)、二二〇～二四〇頁。
- (9) 『昭和』第一巻、四七二頁。
- (10) 『宗見茶話集』、二四〇頁。
- (11) 『昭和』第一巻、一五二頁。
- (12) 『昭和』第一巻、五二四頁。
- (13) 『東都茶会記』(以下、『東都』と略記する) 第四巻、六二二頁。
- (14) 『茶会漫録』(以下、『漫録』と略記する) 第八集、三一～三四頁。
- (15) 『大正茶道記』(以下、『大正』と略記する) 第一巻、六五二～六五七頁。
- (16) 『昭和』第一巻、五二三頁。
- (17) 吉田圭蔵『越沢宗見翁 茶道聞き書き抄』(北国出版社、一九七〇年)、一九九頁。
- (18) 『昭和』第一巻、三五二頁。
- (19) 『昭和』第一巻、五五三～五五六頁。
- (20) 『昭和』第一巻、七三一～七三五頁。

- (21) 『東都』第四卷、六一九～六二八頁。
- (22) 『大正』第一卷、六一九頁。
- (23) 『昭和』第二卷、二三七～二四〇頁。
- (24) 『大正』第二卷、四五五～四五九頁。
- (25) 『昭和』第二卷、二三八頁。
- (26) 『昭和』第一卷、二四三頁。
- (27) 『大正』第二卷、三八一頁。
- (28) 『昭和』第一卷、六九四頁。
- (29) 『昭和』第一卷、一五〇頁。
- (30) 『昭和』第一卷、二八六頁。
- (31) 『昭和』第一卷、八七七頁。
- (32) 『昭和』第二卷、三〇四頁。
- (33) 『昭和』第一卷、一四九頁。
- (34) 昭和三年二月「龍尾茶会」(『昭和』第一卷、二八四頁)、昭和四年
十二月「歳暮茶博士」(『昭和』第一卷、四七〇頁、昭和六年十二月「一
打歳暮茶会」(『昭和』第一卷、八七一頁)。
- (35) 高橋義雄『大正名器鑑』(大正名器鑑編纂所、一九二二年)第一編、三頁。
- (36) 『筭のあと』下巻、四七一頁。
- (37) 寺社や博物館と、その収蔵数は次のようであった。なお、東京の帝
室博物館を除き、すべて京都に所在する。龍光院(四、三)、西本願寺(二、
一)、東本願寺(二、〇)、天寧寺(〇、一)、孤蓬庵(〇、一)、毘沙門堂
(〇、一)、本國寺(一、〇)、帝室博物館(〇、一)。
- (38) 六位以下の府県は兵庫県(六人)、神奈川県(二人)、岡山、島根、滋賀、
三重、静岡県が各一人であった。
- (39) 『近世道具移動史』、一九七頁。
- (40) 『昭和』第一卷、二八六頁。
- (41) 『即翁遺墨茶会日記』。
- (42) 『茶道春秋』下巻、一六頁。
- (43) 『大正』第一卷、六五三頁。
- (44) 『大正』第一卷、六五三頁。
- (45) 『大正』第一卷、六五五頁。
- (46) 『大正』第一卷、六五五頁。
- (47) 『大正』第一卷、六五五頁。
- (48) 『大正』第一卷、六五六頁。
- (49) 『大正』第一卷、六五六頁。
- (50) 『大正』第二卷、三四七頁。
- (51) 『大正』第二卷、三七八頁。
- (52) 『大正』第二卷、三八〇頁。
- (53) 『大正』第二卷、三八〇～三八一頁。
- (54) 『大正』第二卷、三八二頁。
- (55) 『大正』第二卷、三八二頁。
- (56) 『大正』第二卷、三八二頁。
- (57) 『大正』第二卷、七四二頁。
- (58) 『大正』第二卷、七四二頁。
- (59) 『大正』第二卷、五〇一頁。
- (60) 『大正』第二卷、七四三～七四四頁。
- (61) 『大正』第二卷、七四五頁。
- (62) 『大正』第二卷、七四三頁。
- (63) 『大正』第二卷、七四三頁。
- (64) 『大正』第二卷、七四三～七四四頁。
- (65) 『東都』第四卷、六二〇頁。
- (66) 『漫録』第一集、一六四頁。同様の批判は、斑鳩庵の床に明月調の

大横物を掛けた大正一一年四月の「茶友追福会」に出席した高橋義雄からも次のように指摘されていた。

明月¹⁾の大横物又は鍍金の大経筒を窮屈なる斑鳩庵の床中で見るよりも、同庵は後日に残し置き、今回は広間に使はれた四畳半を本席として、其広い洞床に此名幅、名器を飾られた方が一段の光彩を放つたであらうと云ふのは五客一致の意見であつた(『大正』第二巻、一一九頁)。

- (67) 『大正』第二巻、一八六頁。
- (68) 『昭和』第一巻、八七頁。
- (69) 『昭和』第一巻、八八―八九頁。
- (70) 『昭和』第一巻、九三頁。
- (71) 『昭和』第一巻、八九頁。
- (72) 『昭和』第一巻、九〇頁。
- (73) 『昭和』第一巻、九二―九三頁。
- (74) 『昭和』第一巻、九三頁。
- (75) 『昭和』第一巻、一七九頁。
- (76) 『昭和』第一巻、一八一―一八二頁。
- (77) 『昭和』第一巻、一八二頁。
- (78) 『昭和』第一巻、一八三頁。
- (79) 『昭和』第一巻、四四六頁。
- (80) 『昭和』第一巻、四四七頁。
- (81) 『昭和』第一巻、四四八頁。高橋義雄は松花堂筆「大津馬」をなかなか出さない根津嘉一郎への不満を次のように綴っている。

当庵主が例の松花堂筆大津馬を出し惜んで、今年もとう／＼披露に及ばなかつたのは何等の意地悪ぞ、斯くて何時まで之を隠匿する積りにや。先輩茶友中には既に八十を越えた老体も少からざるに、馬

の相貌をも拝ませずムサ／＼彼の世に旅立ちせしむるは、如何にも無慈悲な仕打ならずや。余等も今度までは我慢するが、来年こそは何うでも彼の馬を引出さざる可らずと談判した処が、庵主もとう／＼我を折りて、左らば来年は、歳暮と云はず秋季名残の茶会に於て必ず之を披露すべしと誓約せられた(昭和三年龍尾茶会)。

- (82) 『昭和』第一巻、四五一頁。
- (83) 『昭和』第一巻、四五一頁。
- (84) 『昭和』第一巻、四五一頁。
- (85) 『昭和』第一巻、四四九頁。
- (86) 『大正』第三巻、四三八頁。
- (87) 『大正』第三巻、四三八頁。
- (88) 『大正』第三巻、四三八頁。
- (89) 『大正』第三巻、四三九頁。
- (90) 『大正』第三巻、四三九頁。
- (91) 『大正』第三巻、四三九頁。
- (92) 『大正』第三巻、四三九頁。
- (93) 『大正』第三巻、四三九頁。